新仏二柱を悼み

尼講法会営まれる

穏やかな日和に恵まれた六月八日、恒例の尼講の法会と追悼会がいかるぎ館で行われました。

例年の通り西慶寺、常称寺、宮森の南桂寺さんをお招きしての読経や法話がありました。

「怨は水に流し恩は石に刻め」という南桂寺さんのお話が心に残りました。

今回追悼した物故者の方は林ゆき様（釋尼敬誠）八田十三子様（長光院釋尼能説）の二柱の方々でした。

改めてご冥福をお祈りいたします。

昭和に入って法名帳に記載合祀された頼成の女性物故者は合わせて三百五十五柱となりました。

なお、今年の当番は公文名常会の皆さんでした。お世話様でした。

新緑の増山城跡を巡る

第三十二回般若地域巡り

数えて第三十二回を迎えた公民館・般老連高齢者学級共催の地域巡りが、薄曇りの六月八日、およそ七十人が参加して催されました。新設された増山陣屋前の駐車場からスタート、まず大手門に向かい、そこで曲輪の会代表の津田義弘さんや市の学芸員野原大輔さんからお話を聞きました。

そのあと野原さんの案内で、一の丸、本丸であったろうと予想される二の丸、三の丸、池ノ平等屋敷跡を過ぎ亀山橋を渡り、陣屋前までの約一時間半の行程でした。途中に作られた堀切、空堀、竪堀、切岸などの説明を聞き、時の名将上杉謙信にも堅固な城だと言わしめた程よく考えられた山城だと思いました。当時に思いを巡らしながら歴史を学ぶ有意義な地域巡りでした。

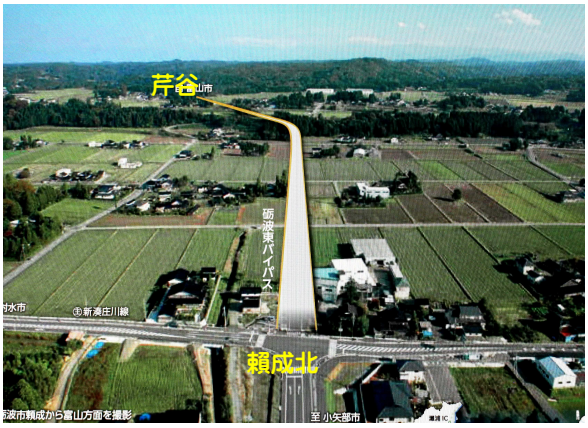
（林　孝行　記）

大手門前で解説を聞く一行

砺波東バイパス 延伸に先だち 埋蔵文化財発掘調査始まる

国道三五九号線砺波東バイパスの頼成北から芹谷間一、六㎞の延伸に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が今月から始まります。

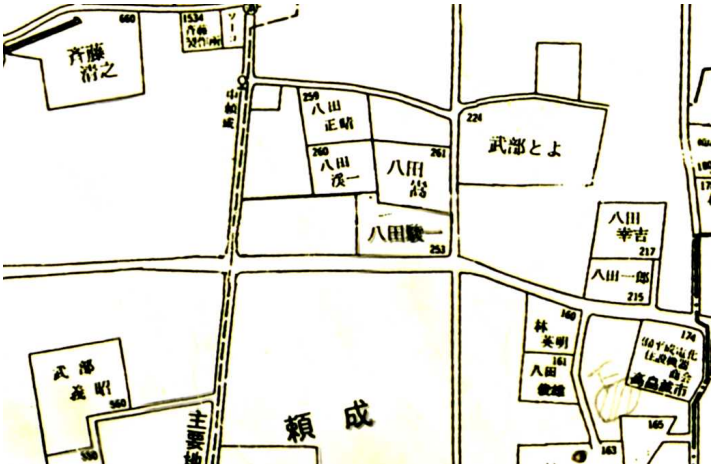
頼成北から現国道に到る間は延長四三二㍍のいかるぎ野高架橋（仮称）によって結ばれることになっています。



ここら一帯は様々な歴史の舞台となった場所なので、この度の発掘調査でそれこそ思いがけない掘り出し物がでるかも知れず、結果次第では工事着工の時期にも関わるだけに関心が持たれます。（イメージ写真　国土交通省北陸地方整備局発行のパンフレットによる）

園児たちと七夕飾り

6月20日庄東センターで、幼稚園の園児や保護者、福祉関係の人達など約50人が参加して恒例の七夕飾りが立てられました。当会会員数名も園児達と話し合いながら短冊の取り付けや飾りの立ち上げに協力しました。



このほど砺波市のホームページ「砺波正倉」に現在の地図と対比して見ることの出来る古地図が掲載されました。（般若地区については、たぶん昭和十年十月、帝国市町村地番反別入地図刊行会から刊行されたものと思われる）

その中から、川原から正覚にかけての頼成の一部を抜き出してここに載せました。

左隅の黒は針山用水です。道路（赤）・宅地・田畑の区画など、今から九十年ほど前の地区の様子が思い出されます。

（左は平成十四年に般若公民館・自治振興会の作成したもの）

トピックス

北日本新聞社杯パークゴルフ大会砺波地区予選が、十四日下村パークゴルフ場で開催され、二位入賞の当会委員林義夫さんが、地区代表として県大会に出場されることになりました。

らんじょ浮世亭だより

今回はスカットボール大会と歌の集いをあわせて行いました。スカットはA、B二組の予選、各組上位四人計八人によるトーナメント方式で、A組からは高畠夏子さん、B組からは坂東勲さんが決勝に進出、僅差で坂東さんが優勝しました。

また、歌の集いは、りんごの歌、北国の春、月の沙漠、千の風になって、戦友など、歌謡曲、童謡取り混ぜて１０曲を伴奏に合わせてみんなで歌いました。

午後四字名句書写の第二回目として「長楽無極」「和敬静寂」の２句を取り上げ、いろいろな書体で書いたり、その意味を調べたりしました。最後に、今まで通り仏説阿弥陀経を読誦して終わりました。

次回は７月１６日（第三水曜日）です

知っているようで知らない頼成。知らないようで知っている頼成。そんな頼成のアレコレを見たり聞いたり話したり。

いかるぎ館　9時開館。頼成アレコレは10時から約1時間。午後は1時から。3時ごろ終了。

高齢者情報

「みまもり配食」について

砺波市社会福祉協議会が市内のひとり暮らしや高齢者二人世帯など、日頃から地域の見守りが必要な方を対象に希望者へ実施しています。毎週一回、見守りの訪問を行うことで対象者の安否を確認することを目的に、昼食の弁当が届けられます。弁当は南部デイサービスセンターや調理ボランティアの皆さんにより高齢者向けに調理されたもので、自治振興会など各地区の配食ステーションに配達され、配食ボランティアや民生委員児童委員の手で利用者の自宅に届けられます。

昼食代金は一食三百円です。「みまもり配食」の詳細については、市社会福祉協議会（☎32／0294）へお問い合わせください。

いかるぎ

のちに映画にもなった「戦争を知らない子供たち」という歌がヒットしたのは一九七〇年のことでした。ベトナム戦争が泥沼化し多くの若者達が命を落としていった時代。子供達を二度と戦場に送ってはならないという願いを込めた反戦歌として、大阪万博のコンサートでも歌われ、多くの人に親しまれました。

あれから四十年。その子供達はみな大人になりました。安倍さん（総理）も菅さん（官房長官）も石破さん（自民党幹事長）も、あの田母神さん（元航空自衛隊幕僚長）もみな戦後生まれです。いま、その「戦争を知らない大人たち」が、憲法９条（戦争の放棄）の改正や集団的自衛権の行使容認を熱っぽく主張しています。

核開発を急ぐ北朝鮮、軍事大国化して近隣諸国を力で威嚇しはじめた中国。そんな厄介な隣人達の脅威から国を守るためと言われれば、確かにそれも一理あるとは思うものの、どこか戦争のにおいが漂いはじめたような一抹の不安も拭いきれません。

老い先短い我々には関わりのないことと言えばそれまでですが、可愛い子や孫に二度とふたたび軍靴を履かせることのないよう、ただひたすら願うばかりです。

（写真　学徒出陣　前途有為な多くの若者が戦火に消えたことを忘れまい。）